

# 春燈

12月号

PDF制作 俳誌のsalon

昭和二十一年七月  
日誌  
種別植物誌  
昭和二十一年七月  
行一五號行(毎日)日誌社  
昭和二十一年七月  
新刊

# 万太郎の句

## 燈籠のよるべなき身の流れけり

句集『流寓抄』昭和三十二年

利休茶地の縮緬袱紗に白抜きの際文字の作品。ずっと私の胸中に棲む句。傘雨師は小説には書かなかった私生活、句では鮮かに有りの儘を詠う。「嘆かひ」の言葉とリズムが美しい。家を捨て、世過ぎも下手、身も心も流離うばかり。更に此の年、ご子息の逆縁に遭う。「……身の流れけり」の切字にひそむ影は濃く深い。師の言う、余情無きは俳句では無いと。燈籠の灯は消えずたゆたう。

益田寿美子

# 万太郎の句

## 水仙やホテル住ひに隣なく

句集『これやこの』昭和十八年

俳句を始めたきつかけが、敦の俳句臭くない句に引かれたからで、万太郎俳句は「ちえつ、うまいなあ」と思うばかりで無関心だったが、あるとき、万太郎には意外に旅行吟、海外吟が多いことに気がついた。旅行・海外吟はいつも失敗ばかりだが、万太郎句を見れば、海外吟といつても、特別なことはなく、普通に詠めばいいのだと分かる。掲句は戦中の上海キャセイホテルでの句。

森 下 賢 一

主宰の句

# 西ヶ原日記（一）

鈴木榮子

甲斐性のなくて熊手の小ささよ

長刀の女学生ゆく休暇果つ

丸橋忠彌の墓の木の実のなに探る



醬油問屋帳場結界啞の虫

脇坂藩赤穂家来の夜長かな

醪釀す五指ばらばらと散らしけり

三十石桶中のぞく梯子の足の蜘蛛

観月会大神宮宮司の麻袴

曼珠沙華大きく咲きて観賞花

今日といふ一日一日を十二月



徒然に

上杉静子

今朝秋や松本藩御用塩の道  
人恋ふや山の秋蝶蛾眉あせて  
日の没ればけものの影す枯案山子  
かまつかや枯れても燃ゆる地の底へ  
秋曙漁舟始動の波起す  
日は西へ朱を飛ばしあふ曼珠沙華  
背すぢより冷ゆる一人の夜なりけり  
みちのくや山風夜ごと雪を呼ぶ  
残照に欲を返し枯レ急ぐ  
冬の鴟生きぬく気魄ありにけり

ふるさとの今昔

柴崎甲武信

靈棚や朝まんじゆうに昼うどん  
父遺ししシベリヤの匙雁渡し  
一茶一行昼餉の里や水澄めり  
「白子宿」てふ銘の新酒や佐渡生れ  
お富士山うら高揆の砦かな  
一隅の墓群同姓石露の花  
八丁の尾頭に酌む恵比須講  
ハケ奥の叢祠に時雨宿りかな  
スキ―帽総領米屋継がざりし  
蔵窓に読みし禁書やからつ風

# 当月集

鈴木 榮子選



○ 宮崎 裕子

人嫌ひ草の実つけて戻りけり  
残る蚊を打ちて読み継ぐ三国志  
悔残る一期一会やにぎり酒  
飽食の時代の五穀とろろ汁  
待ち合すカフェのボサノバ棉吹けり

○ 森 下 賢一

みみず鳴くおのれに返る酒の果  
滝の前経済市況聞く男  
猿酒のころや棚より忘れ酒  
コンテナの落書読んで鯊釣れず  
霧に酌む本心カードのごとく伏せ

○ 田 嶋 洋子

○ 小 泉 三 枝

うす口醬油育む水の澄みにけり  
片しば竹の節の屈折そぞろ寒  
去ぬ燕古き町割惜しみけり  
雁の棹つなく淡路と須磨明石  
敦盛を語る須磨琴雁渡し

○ 田 嶋 洋子

桔梗や味噌糺屋の通し土間  
桶屋町魚町秋日澄みにけり  
シャネルめく脇坂家紋小鳥来る  
運動会寝姿山の立ち上がる  
月の笛熱き心に沁みにけり

# 春燈の句

鈴木 榮子選



鱒売り十年前も鱒売り

東 京岡野イネ子

エノケンの映画観に行く秋時雨

高麗川を埋めつくしてや曼殊沙華  
高麗の里へ燃え移らんと曼殊沙華

鳴物に鬼女の出となる紅葉狩

むきみ隈とりて案山子の機嫌かな  
栗飯やどこぞに母のあるやうな

直哉忌や鮎屋の猫の名は小僧

家居ごもる胡桃のなかのラビリンス

稲の秋雲はひかりをこぼしゆく

千 葉太田佳代子

ふたたびは帰らぬ秋の雲なりし

新刊書山積みにあり鳥渡る

天気図の台風の目のただの点

地に落ちて地のぬくもりの木の実かな

蠟燭の突張り通し果てにけり

東 京高橋十三夜

こぼれ萩昨日に終へし七七忌

旅先のヘップバーン展秋高し

神奈川 荒井 慈

振り向けば金まみれなる金木犀

新涼や洗礼服の綿ローン

俱梨伽羅不動三猿足下秋麗

ヘップバーンのバレエシューズや星月夜

東 京平野加代子

爽やかにユニセフ大使ヘップバーン

アウトレットショップ花野の裾を踏みにけり

吾亦紅野の風まとひ売られけり

埼 玉市川 玲子

恋の日のベンチに今日も木の実降る

吾亦紅添へて活けたき野草あり

十六夜の雲居に仰ぐ流離かな

# 余言

鈴木 榮子

うすくち醤油育む水の澄みにけり

小泉 三枝

今年の関西大会は少し遠く不便であるが、見せたい、見たいが一致して東西の希望を入れ、兵庫県龍野へ足をのぼした。定員五十名としてお断りした方もあったが、結局本人より家族の病気等でキャンセルの出るケースが出て来た。会員の年齢も高くなり要介護の親達も増えてきたことを改めて痛感した。

播州龍野は五万三千石の脇坂淡路守の城下であった。いまは城もなく真白い壁と立派な瓦葺きの角櫓だけを再建し、それが町の方々から見え悲愴なほど美しかった。

いまは姿、形のよい城が充分に偲ばれ、大きな登城門が昔を偲ばせた。

「うすくち醤油」はここ龍野が発案と聞いて、水清き揖保川のあつてのことと納得した。

中国山脈の水を集めた揖保川、播磨平野の豊かな小麦、山間部の良質の大豆、加えて赤穂の塩と揃えば銘醸造の名を高からしめるのは当然と思つた。

姫路から姫生線本龍野で下りる。揖保いほは神様がこぼした飯粒から名付けられた粒評（いひほのこおり）、揖保川がこの山里の盆地を抱くようにおだやかに囲み流れている。

句は、水澄むという動かし難い季語を据え、特産うすくち醤油に一気に持つて来てつなぎ、見事に詠み上げた。

当日の他の四句も揃っている。勉強会というのは地の時、人の時、体調の充分を整えた時ぐんと力を伸ばすことがある。作者はその時であつたのであろう。他にも何人かの方がそういう経験をしたようだ。

霧に酌む本心カードのごとく伏せ

森下 賢一

掲句は著述業の作者の軽口のようなものでジョークと受取りたい。

こんなことを詠む作者でもないし、虚実皮膜だがなんで採つたと言われればリズムといかにも作者のポーカーフェースが浮かんでしまうからだ。といつてもこの頃二、三度年おめにかかったことがない。「卯波」にも「龍」にもご無沙汰している故か。